

## 令和6年度 第4回足立区子ども計画審議会 会議概要

会 議 名	足立区子ども計画審議会 第4回		
事 務 局	政策経営部 子どもの貧困対策・若年者支援課		
開 催 年 月 日	令和7年5月21日(水)		
開 催 時 間	午後6時30分 ~ 午後8時30分		
開 催 場 所	足立区役所 中央館8階 庁議室		
出 席 者	<b>【委員】</b>		
	藤原 武男 会長	阿部 彩 委員	末富 芳 委員
	山田 哲也 委員	加藤 泰弘 委員	高木 政代 委員
	中山 勇魚 委員	小野 茜 委員	菊地 美穂 委員
	田中 優哉 委員	山崎 衛 委員	太田 せいいち 委員
	しぶや 竜一 委員	ぬかが 和子 委員	水野 あゆみ 委員
	勝田 実 副会長	中村 明慶 委員	
	<b>【事務局】</b>		
	政策経営部 あだち未来創造室長 兼務 岩松 部長	総合事業調整担当部 神保 部長	子どもの貧困対策 ・若年者支援課 濱田 課長
	子どもの貧困対策係 今 係長	子どもの貧困対策係 佐々木	子どもの貧困対策係 樫村
若年者支援推進担当 加美山 係長	若年者支援推進担当 済賀	若年者支援推進担当 竹内	
関 係 所 管	絆づくり担当部長	福祉部長	衛生部長
	教育指導部長	学校運営部長	子ども家庭部長
欠 席 者	川上 重昭 委員		

<p>会 議 次 第</p>	<p>1 会長あいさつ  2 こども計画「施策」の検討について【資料1～5】  3 意見交換  4 答申書について  5 事務連絡</p>
<p>資 料</p>	<p>第4回 足立区こども計画審議会 次第  こども計画審議会 席次表  【資料1】 第3回審議会でのご意見を集約  【資料2】 第3回審議会の審議結果を踏まえた区の現状  【資料3】 施策と取り組み一覧  【資料4】 第2期第1回子どもの健康・生活実態調査  【資料5】 足立区こども計画審議会情報提供資料  【机上配付】 ライフステージごとの取り組み状況</p>

## 令和7年度 第4回足立区こども計画審議会

### ○事務局

それでは定刻より少し早いのですが、皆様おそろいですので始めさせていただきます。ただいまから第4回足立区こども計画審議会を開催します。本日はお忙しいところご出席を賜りまして、誠にありがとうございます。子どもの貧困対策若年者支援課の濱田と申します。どうぞよろしくお願いいたします。次第に入ります前に、本日の資料について、まず確認をさせていただきたいと思います。まず事前にお配りさせていただいております次第でございます。次にA4の資料1と右肩にあります、第3回審議会のご意見の集約というものでございます。続いて、右肩に資料2と書いてあります、第3回審議会の審議結果を踏まえた区の現状と書かれた資料です。続いてタイトルはないのですが、A3縦の資料でございます。施策の一覧と、それに紐づく取組の一覧を記載している資料です。続いて資料4として、第2期第1回子どもの健康・生活実態調査を記載している資料です。続いて資料5として、足立区こども計画審議会情報提供と記載している資料となります。以上が事前に送付している資料となります。また、本日机上配付の資料がございます。席次表とあとはライフステージごとの取組状況と記載したA3横の資料でございます。これ前回もお配りしているのですが、今回までに新たに追加したのもございますので、最新版ということで机上に配付しています。なお、変更点については黄色で囲っていますので、そちらをご確認いただければと思います。資料は以上です。不足等ございますでしょうか。

続いて次第に入る前に、事務局から報告がございます。本日第4回審議会から、区職員の審議委員に変更がございます。前回まで長谷川副区長に審議委員を務めていただきましたが、今回から勝田実副区長が委員として就任します。勝田委員、一言ご挨拶をお願いいたします。

### ○勝田副会長

勝田と申します。長谷川の後任で3月29日から副区長になっております。3月までは政策経営部長として会の内容を確認しておりましたので、皆さん方の熱心な議論はすべて聞いておりますので、改めて委員として参加させていただいて、計画の策定に携わりたいと思いますので、ぜひよろしく願いいたします。

### ○事務局

ありがとうございます。なお、前任の長谷川委員は審議会の副会長を担っておりましたが、変更に伴いまして副会長は後任の勝田委員が引き継ぐ形としたいと思いますがいかがでしょうか。

(異議なし)

### ○事務局

ありがとうございます。それでは勝田委員を副会長として就任させていただきたいと思えます。よろしくお願いいたします。続きまして、4月で事務局に異動がありましたので、併せてご報告させていただきます。まずあだち未来支援室長の伊東が福祉部長に異動になりました。

### ○福祉部長

伊東でございます。私も事務局として携わらせていただきましたが、ちょっと立場は変わりましたが、引き続きこの審議会に関わらせていただきますので、ぜひよろしく願いいたします。

### ○事務局

次に政策経営部長で、今回あだち未来創造室長を兼務する岩松でございます。

### ○政策経営部長、あだち未来創造室長 兼務

岩松でございます。私も前回まで教育の方に座っていましたので、この委員会の様子はよく承知しております。どうぞよろしく願いいたします。

## ○事務局

なおあだち未来支援室と所管になっておりましたが、今年度からあだち未来創造室ということで名称も変更になっております。新しい未来を作っていくという意味も込められておりますので、よろしく願いいたします。

続きまして、総合事業調整担当部長の神保でございます。

## ○総合事業調整部長

神保です。よろしく願いいたします。

## ○事務局

続いて前回の審議会と同様のご案内になりますが、この審議会は足立区子ども計画条例第8条により、会議を公開とさせていただきます。会議録についてもホームページなどで公開させていただきますことをご了解願います。ご発言をしていただく際は、お手数ですがお手元のマイクを押していただきまして、マイクランプが点灯しましたらご発言をいただき、再度ボタンを押していただきますようお願いいたします。それでは、ここからは藤原会長に進行をお願いしたいと思います。よろしく願いいたします。

## 1. 会長挨拶

### ○藤原会長

本日も皆様お忙しいところお集まりいただきましてありがとうございます。私は、特に変わったことはないのですが、老眼が進み、眼鏡を付けて見ないと顔が分からないので眼鏡になったという感じですがよろしく願いいたします。濱田さんからもありましたが、ホームページで議事録が公開されていて、皆さんもご確認をいただいていると思います。私も改めて前回のものを読み直してみて、とても充実した議論をしているなと思っています。本日も前回に引き続きまして、皆様の活発なご議論をお願いしたいと思います。

## 2. 子ども計画「施策」の検討について

### ○藤原会長

それでは、まずは次第の2。子ども計画施策の検討についてということです。今日が最後の1回前ですが、次が区長に議論をした内容を報告するという会だそうで、実質的な議論は今日が最後だそうなので、具体的な政策を足立の子どもたちのためにこういうことをやっていくべきだとか、あるいは保護者も含めて情報が届かない課題をどう解決していくのかとか、前回のまだ宿題もあったと思いますが、そうしたことについて存分に議論ができればと思います。では資料について事務局からご説明をお願いします。

### ○事務局

それではお配りさせていただきます資料について、順番にご説明をさせていただきます。まず資料1をご用意ください。こちらは第3回審議会でのご意見をまとめたものでございます。各委員から様々なご意見を頂戴しています。左側の1番から5番。右側の6番と7番ということで、前回のいただいたご意見をまとめています。

まず一つ目としては子どもの安全の視点についてのご意見を頂戴しています。こちらは昨今のメディア等でもいろいろと話題になっておりますネット犯罪や闇バイトといったようなもの。それから、災害や違法薬物。違法薬物にかかわらずオーバードーズといった社会的な問題まで含めて、そういったところから子どもたちを守るような施策が必要なのではないかというご意見を頂戴しています。

続いて2番目。居場所関係についてです。こちらについては、既存の居場所を含めていろいろ場所も拡充してきてはいるけれども、居場所の中でいきいきと子どもたちが自分を表現したりとか、思いを吐き出せるような場所が必要なのではないかといったようなご意見。あとは地域学習センターですとか、あやセンターぐるぐるといったような、子どもたちが自由に過ごせ

るような場所を充実させる必要があるのではないかといったご意見。あとは大学生などのロールモデルを配置することによって、より居場所としての質の向上が見込めるのではないかとといったご意見を頂戴しています。

続いて就学前教育については、非認知能力の向上といったところは、これは早期に対応することによってより効果を発揮するといったようなところから、公立の保育園ですとか、幼稚園等の施設の中からそういった就学前教育を実施することによっていい影響が出るのではないかとといったご意見がありました。

続いて外国ルーツについては、外国にルーツを持つ子どもたちの日本語教育であったり、居場所であったりというような支援もさることながら、一緒にいる保護者が言葉をしゃべれない可能性があるということも含めて、そういった保護者への支援の拡充が必要だというご意見を頂戴しています。

最後に青年期の保護者への支援というところが、やや手薄のように見えるというご意見を頂戴しています。こちらは本日机上に配布させていただいておりますライフステージごとの取組状況の中の保護者向けの支援の若年者の大学生以降の保護者の支援のところがありませんね、こちらの資料を見ると確認できると思います。そういったところをご指摘いただいています。こういったところについては、次のページでご説明しますが、施策、ないしは施策の中に紐付く取組として、今後整理させていただく予定です。

続いて6番については、既存の支援に当てはまらない人といったところがですね、ターゲットアプローチ、ユニバーサルアプローチということで幅広い取組の方を足立区としては実施しておりますが、ターゲットには足りない。ユニバーサルでも救いきれないような一定層の人がいるだろうと。そういったところの層について、何らかの救いの手を差し伸べるような仕組みづくりが必要なのではないかとのご意見を頂戴しています。

続いて7番についてです。こちらは情報を伝える仕組みづくりについての話ということで解釈しております。こちらはICTの技術を使った情報発信といったところも有効な手立てとしては考えられるけれども、例えばローテクのような人伝いに情報を伝えることを機能として持つことによって、より伝わるといったところが情報の伝え方の機能として生きるのではないかとご意見を頂戴しています。こちらの6番と7番については、次のページで説明させていただき、すべての施策・取組に影響を及ぼすものとして、視点として整理させていただきました。

続きまして、次のページをご覧ください。前回の議論で柱まで整理させていただき、柱の1、柱の2、柱の3ということで整理させていただいております。柱の1はすべての子ども・若者の生き抜く力を育むということで、子ども・若者への支援。柱の2が安心して子どもを産み育てる環境を充実させるということで、子育て家庭への支援。柱3が地域全体で子どもの成長を支えるということで、地域社会が子ども・若者・子育て家庭を支援するといった体制づくりについての柱ということで整理しました。柱の1に紐付く施策については、1-1から1-6で整理しています。1-1から1-6の並びについては、子どもの心と体の成長支援というところで、すべての基本となる心と体の成長支援から、自立に向かって進んでいくような成長過程に応じたような施策の並びを意識して並べております。柱の2については、2-1、2-2がユニバーサルアプローチ。2-3、2-4がターゲットアプローチということで整理しました。3-1、3-2については、3-1が企業・団体等が取り組む取組。それから3-2が住民がそういった取組に参加できるような仕組みづくりといったような形で整理しています。施策1-1から1-6。2-1から2-4。3-1から3-2のすべてに視点という形で影響を出すものとして、視点の1から3番目で整理しています。一つ目が子ども・若者の意見表明・参画の

創出ということで、すべての施策の実施。取組を実施する際には、子ども・若者の意見の反映や、参画の創出といったところを意識していくこと。それから、多様なニーズや課題に応じた切れ目ない支援というところで、先ほどの前ページの6番のところを視点として整理したもの。視点の3が必要な人に対する伝わる情報発信ということで、前のページの7番を意識して、視点として整理したものということで整理しています。特に今回施策の中で、新しい切り口として入れているものとしては、子貧計画の延長線上ということで、いろいろな課題のある子どもたちや、配慮が必要な子どもたちへの取り組みということで、いろいろ実施はしてまいりましたが、今回子ども計画に生まれ変わることによって、前向きな部分の計画の要素も入れていくというところもあります。引き続き子貧の要素を色濃く出していくというところを踏まえまして、施策の1-3のところが生きづらさを感じる子ども・若者への伴走支援ということで、例えば不登校の子どもたちですとか、外国にルーツを持つ子どもたち。それから発達に課題があるような子どもたちといったような取組を整理させていただいております。1-4については、審議会の中でもご意見を頂戴しております、命を守る教育と支援の充実ということで、自殺に対する対応ですとか、あとは災害対応。それから命を守る対応といったようなところで、取組として整理させていただきました。1-6については意見表明・参画。それから自立へ後押しということで、子ども・若者が意見を表明し、参画できるような仕組みづくりということで、具体的に区で取り組んでいる取組の方を、新たな施策の中にぶら下げています。自立への後押しについては、課題を抱える子どもたち。夢に向かって進む子どもたちを支援するような取組を、主立った取組として整理しています。

続いて柱の2-3、2-4については、こちらは子貧計画のところを色濃く出した取組として整理しました。2-3については、経済的困窮家庭への生活支援ということで、一人親ご家

庭への支援等を取組として整理しています。2-4については、行きづらさを感じる子ども・若者を守るための家庭の支援ということで、施策の1-3と関連した取組の家庭版ということで整理しています。資料1の説明は以上です。

続いて資料2をご覧ください。資料2については、こちらは審議会からいただいたご意見。資料1の1ページ目の施策に関するご意見をまとめたもので、そのご意見の中で今区の現状としてどうなっているかというところを、改めてこちらの方に記載しています。例えば1ページ目。子どもの安全の視点というところについては、まず区の方で実施している既存の取組の中では、少年非行対策については東京都警視庁の取組を情報発信しています。2番目として、防犯対策としては未就学児から中学生に至るまでですね、防犯劇という形で安全・安心の意識啓発の取組を実施したり、防犯普及啓発をしています。それから外国人の子ども向けの安全啓発講座といったような取組も併せて実施しています。また、最近若者自殺が増えているといったデータもありますので、命に関する相談というところも引き続き力を入れて実施しているところ です。

次のページをご覧ください。こちらは居場所関係の事業として整理しています。こちらは外国にルーツを持つ子どもたちの学習支援や、子どもたち向けの子育てサロン事業ですとか、児童館事業といったところをまとめさせていただいたものです。新たに足立区としても、夏休みの子ども向けの居場所事業を拡充してきていますので、そういった事業の取組等を整理しています。

続いて3ページ目は就学前教育です。こちらは前回の審議会の中でも担当部長からご報告をさせていただきましたが、就学前教育の一つの取組として、とうきょうすくわくプログラムといったようなところで、非認知能力の向上に資するような取組を実施しているといったことを報告させていただいております。また、外国ルーツに関する取組としては、利用児の保護者向け

に日本語教室のイベントを行ったり、保護者向けの取組についてもある程度拡充をしているというところとか。あとは日本語適応指導講師を派遣するといった事業を実施しているところを掲載しています。最後の5の青年期の保護者への支援というところですが、先ほどライフステージごとの取組状況の中で、ユニバーサルアプローチの若者の親向けの支援が足りていないといったお話をさせていただきましたが、現状としても実施しているところは、ターゲットアプローチの切り口での事業の方を主立ったものとして、青年期の方々への事業としては実施しているというところになります。またこの青年期の保護者への支援については、今後必要性も含めて議論をする必要があると考えています。資料2の説明は以上です。

続いて、資料3については、今ご説明させていただいた柱ごとの施策、及び細かな資料2で説明した区の中で実施している取組等を、施策ごとに整理しているものです。本日施策の方を議論させていただきますので、実際の施策の中に紐づく事業が、こういったものがあるよといったところを理解していただくために、こちらの方に載せているところです。資料3は以上です。

続いて、参考としてお配りしている資料のご説明をさせていただきます。まず資料4のご説明ですが、担当の所管部長が本日出席していますので、部長からご説明をいただきます。

#### ○衛生部長

衛生部長の馬場でございます。では、資料4の第2期第1回子どもの健康・生活実態調査について報告させていただきます。こちらの調査は、平成27年から足立区は子どもの貧困対策を開始したわけですが、それに合わせてすべてのお子さんが家の家庭環境に左右されることなく、自分の夢や希望が実現できるようなそういった地域社会を作ろうということで、そのためには根拠のある対策を、効果的な対策を打つことが必要になりますので、生活の様子ですとか、健康の実態を把握するために始めた調査です。

平成27年から令和5年まで9年間の調査を終えまして、一区切り付いたのですが、昨年、令和6年度から第2期として、当時の1回目の調査と今回の調査を比べながら、どのあたりに成果が出ているとか。あとはこの間コロナがありまして、だいぶ生活スタイルが変わりましたので、現在の生活の様子を把握して、新たな対策を打つことも検討するために、第2期の調査を始めています。表紙にありますように、平成27年度と令和6年度の小学1年生を比較。こんなに大きく変わりました、というところでは、生活習慣では区が進めてきたベジファーストは増加傾向。虫歯のいない子どもの増加ということで、以前は実は生活が苦しい世帯のところは、5本以上の虫歯の子が多かったのですが、数全体として見て、これだけ虫歯の本数が減らせました。あと家庭環境では、小学校入学前に通っていた施設が、この右側のグリーンのところは私立幼稚園ですが、幼稚園が減って、区立の保育園や私立の保育園が増えまして、それだけ共働き世帯が増えたというところが見られます。あとはこれまでの9年間で出てきたということでは、保護者に困った時に相談できる相手がいると、子どもの健康リスクが軽減できるとか、子どもが望ましい生活習慣を身に付けると、レジリエンスを培えることが分かっています。

健康についてのところでは、肥満傾向というのは実はなかなか変わらないというか、少し肥満割合のお子さんは減ってはいますが、依然として足立区は東京と比べても全国と比べても高いという状況です。食生活についても、朝ご飯のところもあまり数字は変わっていません。家庭生活も歯磨き、平日の就寝時間というのは、若干こちらの方は悪くなっています。右側を見ていただいて、保護者の生活で、保護者の相談相手の有無です。子どもの健康・生活実態調査をやりながら、保護者に困った時に相談相手がいると、子どもの健康状態が良くなるというデータが取れましたので、ASMAP事業と言いまして妊娠期の届け出の時に区の方で20を超える問診をして、その中でそういったリスクの

高いお母さんと、割と平坦にあまりリスクがそれほど高くない妊婦さんとをランク付けをしまして、特に支援が必要な人には保健師が付いて、出産計画も立てて、その後しっかりと寄り添うということをやってきました。人との関係づくりが苦手なお母さんというのは、最初保健師との関係づくりも苦手なのですが、ある程度信頼関係ができると、今度は別のNPOのきかせて子育て相談事業とかにつないでいって、だんだんにいろいろな人から支援を受けたり、つながることができるような事業をしてきたのですが、平成27年の時は92.8%の方が相談相手がいると回答していました。それが若干ですが、94.0に増えたのと、いないと答えている人が5.7から4.8になってきていますので、じわじわですが私たちは少しここに手応えを感じています。

次のところに、普段の生活における交流の多様性というのを改めて聞いております。これは下にあるソーシャルキャピタルの影響というところにまとめましたが、ソーシャルキャピタルというのは社会関係資本とも言われたりしますが、人間関係がある程度あって、信頼して助け合えるような見えない社会資本があると、親御さんの生活も健康にも、子どもにもいい影響があるのではないかとされているところですが。今回の調査で、親御さんがこちらの質問にあるような項目。高齢者とか10から20代の若者とかこういったところに保護者が、六つ以上の特性の人々と交流があると、子どものレジリエンスが高くなる可能性があることも見えてきました。

最後のページをご覧ください。非生活困難世帯と生活困難世帯の比較です。生活困難世帯。生活が苦しいという世帯は、平成27年の24.8から令和6年の17.6に減ったのと。非生活困難世帯と生活困難世帯を見ると、以前は5本以上の虫歯がある方が19.7%だったのが7.5と減ってきたりですね。野菜から食べる習慣というのは、直接子どもに働き掛けておりますので、あまり非生活困難世帯と生活困難世

帯では差がないというところですよ。この子どもの貧困対策を始める時に、当時、今日ここにいらっしゃる阿部彩先生ですとか、藤原先生に相談しながら、子どもの貧困対策の会議を立ち上げて、こういったことも毎年報告しながら助言をいただきながらここまで続けてまいりました。特に藤原先生は、こちらの子どもの健康・生活実態調査の協定を結んで、第1回目から。当時は成育医療センターの先生でしたが、その頃からずっと一緒に調査を続けてきております。足立区の子どもの健康・生活実態調査に本当に詳しいというか、その分析を一番やっていただいている先生ですので、今日ちょうど先生が会長でお見えですので、先生からコメントをお願いいたします。

#### ○藤原会長

ありがとうございます。このご報告は、去年1年生だった子たち、つまりコロナを未就学期に経験していた子たちと、約10年前に1年生だった子たちを比較していると考えていただけるといいかなと思います。足立区の生活困難層も大きく減少していますし、同じ基準で見た生活困難層においても、健康状態はより良くなっているということが、今ご説明をいただけたかと思えます。

ちょっと付け加えたいのは、子ども施策にも関係し得ることなのですが、このレジリエンスというものが重要だということで取り上げて解析をしている点です。これは非認知スキルと言われるものです。認知スキルというのがいわゆるIQで、それ以外のスキルを非認知スキルという言い方をして、社会情動スキルという言い方もするのですが、OECDなども注目しています。ここには載せていませんが、最もそこに関係する要因は何だろうかということで、アタッチメントが重要であることが足立区の調査からわかっています。アタッチメントの測定は本当は難しいのですが、実はこの小学1年生にざっくりとでも聞いてみることもできるのではないかとするので、その専門の先生とも協議をし

ながら聞いてみました。アタッチメントは何かという、何か子どもが求めた時に、すぐに親が応えていくことで、お子さん自身がきちんと自分は安心して存在してもいいのだという気持ちがあるという状態にあるのかということをやってみました。それを実験的に1歳とか2歳とかで見るということが、通常の測定方法なのですが、なかなか難しい。しかし、何か困った時にしっかり、親に相談ができる、または何か怖いことが起きた時に、どういった行動を取るのかとか、そういったことを質問紙で聞くことによって、アタッチメントを見ることができようということをやってみました。そうすると、小学1年生で見られるアタッチメントができていると我々が考えるものが高い人というのが、レジリエンスが高いことがわかりました。つまり、きちんと安全基地ができるということが、探索行動につながるというアタッチメントの理論はその通りであったということです。レジリエンスというのは、結局いろいろな困難なことがあっても、それを頑張って乗り越えていこうとするスキルなのでということが分かったのです。アタッチメントを与えてくれるお母さん・お父さん、地域の方々、家族を支える場としての地域のつながり、交流の多様化といったことで、ここに書いてあるようなことも大事だということがわかりました。

それで、大きくなっていくと、だんだんその学校の要素が大きくなっていくと思うのですが、この前の年、2年前に私がずっと小1から追い掛けている子たちで見えていくと実はやっぱり家庭の影響というのが、小学校の少なくとも6年生まではずっと強く関係しているということが分かっています。やはりどういうふうにこの未就学期に親が子どもと関わっていけるかということは非常に重要な視点だなと思っています。したがって、どういうふうに親が子どもに関わっていけばいいのかということをやちゃんと根拠を持って示せるデータができています。それをもうちょっと具体的に、実際に保育園・幼稚園において、何をすればいいのかということの

支援というのが、もうちょっと具体的にあるといいなと、この調査結果からも思っています。

○衛生部長

ありがとうございました。以上です。

○事務局

ありがとうございました。それでは、最後に資料5の説明を簡単にさせていただきます。こちらについては、昨年12月に足立区で実施した子育て世帯に向けてのアンケートの調査結果の報告です。内容については簡単にご説明します。まずポイントですが、1ページ目ですね。こちらが子どもの習い事や体験機会がなかなか不足している状況の原因ですが、世帯年収の高い低いだけではなくて、子どもの人数。例えば多子世帯とか、そういったところも大いに影響しているところが調査結果から見えてきた部分です。

続いて2ページをご覧ください。こちらは子どもの習い事や体験機会の状況について、習い事や体験などをさせてあげたいけれども、させられていない理由として、アンケートをとったものです。こちら1位が金銭的な余裕がない。2番目が子どもの健康・生活実態調査の中でも共働き世帯が増えてきたという話がありましたが、そういったところも影響があるのかなと思うのですが、保護者として子どもに習い事や体験をさせる時間的な余裕がないというところが上に上がってきています。

続いて8ページをご覧ください。こちらは少子化の範疇になりますが、実際の子どもの人数が理想の子どもの人数より少ないと回答した割合になります。足立区については、実際の子どもの人数が理想の子どもの人数よりも少ないと回答したのが52.1%です。こちらは正式なものではないのですが、公表されたものでいろいろと見てみると、多くの調査で6割程度が理想の子どもの数が持っていないという調査結果も出ていますので、そういったところから比べると若干足立区は理想の子どもの数が持ってい

るといったところが分かると思います。

続いて、次のページをご覧ください。理想とする子どもの数が持ていない理由の一つ目が、子育てや教育にお金が掛かりすぎると回答した世帯が62.8%ということはかなり高くなっています。こちらは、国立社会保障人口問題研究所が出している調査を見ると、これは全国の調査ですが、52.6%の方が同じような回答をしていると。そういったところから比べると、足立区の家庭については、子育てや教育にお金が掛かりすぎると回答をした人が、それよりも10ポイント程度高くなっているといった状況になっております。

こういった調査を踏まえまして、足立区としては調査結果を踏まえて新たな施策や事業の取組について、これから検討をしていくということで、情報の共有をこの場を借りてさせていただきたいというところです。資料のご説明は以上です。

#### ○藤原会長

濱田さん、ありがとうございました。いろいろとあるわけですが、どうでしょうか。どうやりましょうか。今、経済的な話があったのですが、そうした経済的な支援のことというのは、この施策の中にはあえて書き込んでいないのでしょうか。

#### ○事務局

経済的な支援については、例えば資料3をご覧くださいと、柱2のですね、例えば施策2-3のところ、経済的困難家庭への生活支援というところですね、主立ったものとして入っています。なので、ある程度経済的な支援というところは、これ以外にも例えば1-6の自立への後押しといったところで、子ども・若者への直接的な支援として、例えば経済的に塾とかに行けない子どもたちに区が無料の塾を提供したりといった事業を実施しています。例えば給付型奨学金のような、今施策の1-6に入れていますが、給付型奨学金のような大学への直接

的な支援も合わせて区としては実施しています。

#### ○藤原会長

ありがとうございます。柱1とか直接子ども・若者の生き抜く力を育むというところから見ていきたいと思います。皆さんいかがでしょうか。もちろんそれ以外のところでも気になるところがある方。こういう施策があるのかといったご指摘でもいいと思います。

情報が届かない人に対して何をやるというたら、どの政策になるのでしょうか。

#### ○事務局

情報が届かない方に届けるというのは、個別の今回は施策としては整理してなくて、施策体系からは外して、視点としてすべての取組や施策を実施する時に、伝わる情報発信というところを意識して取り組むということで整理しています。

#### ○藤原会長

具体的にはどういうことなのでしょう。

#### ○事務局

例えば、衛生部の方で実施している事業で、ASMAPという事業がありますが、例えば保健師が核となって妊産婦について必要な情報を個別に伝えていくといった配慮が代表的な例として挙げられると思います。

#### ○衛生部長

実は事前に藤原先生とは意見交換もしていたのですが、これから今すべてのお母さんが持っている母子手帳が電子化されます。国の方は今年中に仕様を明らかにして、東京都は令和8年1月から、半年後ぐらいには、国の仕様をカスタマイズした電子母子手帳を立ち上げて、一部の自治体から始めていくということです。足立区も国の仕様、そして同じ東京都ですので、そのカスタマイズされた仕様に乗っていきますが。実は東京都の仕様の中には、国の仕様は従来の

ように健診の結果が母子手帳で確認できるとか、国が標準的に定めている情報が取れたり確認ができるようになるのですが、東京都の母子手帳の中には今プッシュ送信型、個別の事情に合わせてプッシュ送信で情報を送ることも今カスタマイズするとアナウンスをされています。それが整ってくれば、ある一定の情報は、衛生部だけではなくて、子ども家庭部とかいろいろなところと情報共有をしながら送れるようになると思います。また、例えば今ですと赤ちゃん訪問の時に、保健師はタブレットを持って出掛けて行って、そこで夜泣きとかで苦勞をしているお母さんはつい子どもの泣き声に反応して、虐待をしたくなるようなお母さんもいらっしゃるの、それにはこう対処するといいいのですよというので映像を見てもらったりしていますので、いろいろなコンテンツは今一緒に、藤原先生の大学と作ってきたというか、作っていただいて一緒に活用をさせていただいているというので、それは盛り込んでいこうと思っています。

ですので、今は保健師それぞれの能力で相手に合わせた情報を伝えているところですが、ここには具体的にはまだ書いていませんが、そういったツールも使って情報提供ができればと考えています。

#### ○藤原会長

今生まれてくる子たちはいいと思うのですが、この時点で幼稚園・保育園に行ったり、小学校低学年とかの子たちでどうしていいか分からない親御さんたちへの支援、情報が入ってこない人たちにどうしたらいいのかということです。

#### ○子ども家庭部長 ども家庭相談室長兼務

先ほど絵本の話もありましたが、実は10月から全家庭訪問事業というものを行ないます。0歳、いわゆる4か月ぐらいから1歳5か月ぐらいのすべての家庭に、全員に月1回以上家庭訪問をして、さっきの絵本の話でもないですが、絵本を配布するという事業をやります。年間4億円の事業ですが。こちらをやることによって、

そこで会話ができればもちろんいいのですが、保護者の悩みを聞くみたいなことができると思っています。絵本を配るといのは、足立区だけだと思います。いろいろおむつを配ってはどうかとか、いろいろな取組がありますが、主に絵本を配っていこうと考えています。10月からちょうど始まるのですが、同じタイミングで子育て支援アプリというものを導入します。そこでアプリをご案内して、予防接種の歴とかも自分で登録して通知ができるので。そこで区の情報もアプリを通じて、もしダウンロードをしていただければ、皆さんにお伝えはできるので。そういうデジタルの面と、アナログの面。家庭訪問の面を組み合わせる事業が10月から始まります。同じタイミングでども家庭センターを10月からやりたいと思いますので、それで進めていこうと考えています。

#### ○藤原会長

ありがとうございます。皆さん、ご意見はいかがでしょうか。

#### ○末富委員

日本大学の末富です。まず柱のとりまとめ、ありがとうございます。とりまとめに向けて若干気になるのが、柱の1と2で、生きづらさを感じる子ども・若者という表現が出てくるのですが、生きづらさを感じるレベルになるとかなりまずくて、逆に感じていないレベルでどうにかしないと、子どものウェルビーイングなんかどうにかできるものではないので、いらないと思います。というのが1点です。

また、先ほどの藤原先生の調査のアタッチメントの話がすごく気になっていて。さっきの話を聞いていると、多分多くの皆さんの頭の中には、お母さんが何歳から何歳まで読み聞かせをしないといけないという図柄が浮かんでしまっていて、それこそがアンコンシャスバイアスです。アタッチメントって養育者ですよ。保育園・幼稚園・こども園等の先生も含めて関わりを持つ地域の居場所。例えば子ども食堂の方

ちも含めて、親プラス親以外の養育者によって  
培われるという概念のはずなので、親への調査  
からアタッチメントの重要性を導くと、ものす  
ごく生きづらさを感じるお母さんが足立区に激  
増するだけではないかという懸念があります。  
なので、アタッチメントという概念は、確かに  
大事なのですが、非常に注意して使わないと、  
お母さんがどんどん追い詰められる概念だとい  
うのがアタッチメントブームの最前線で諸々観  
察している私の懸念です。なので、簡単には使  
わない方がいいし、用語はちゃんと定義して使  
った方がいいと思います。かつ調査の限界があ  
るようで、保育士とか小学校教員は調査してい  
ないのですか。調査していないのだとしたら、  
調査の限界も踏まえて、提言につなげられない  
といけないということは話を聞いていて懸念し  
ました。それと合わせて、少し発想を豊かにし  
ていただきたいと思うのが、柱1の施策1-  
1ですが、心と体の健やかな成長支援という時  
に、アタッチメントの話はですね、その基盤を  
作ることに繋がるとは思うのですが、実際に  
資料の3の方で、それに対応する事業がありま  
すかみたいな話になると、対応していない気が  
します。例えばですが、保健師が家庭訪問をさ  
れて、夜泣きが止まらない赤ちゃんに動画を見  
せてというのは、絶対にママにしか見せていな  
いのだろうと思うのですが。パパは動画を見  
ていないはずだと思いながら聞いていたのです  
が。見せてどうやって寝かしつけたらいいかを  
言うと言ったじゃないですか。でも目の前のマ  
マは、今すぐ寝たいって思っています。睡眠不  
足のままそんな話を聞いても絶対に入ってこな  
いし、今すぐ寝たいと思っている人たちに対し  
て、子ども・若者の生き抜く力とか、安心して  
子どもを産み育てる環境を充実させるみたいな  
ことを言うてはいけないと思っています。

決定的に抜けているのが子育て当事者の意見  
をどうやって聞くかということと。目の前に本  
当に一睡もしていない人が現れた時に、今の行  
政は今ショートステイがあるじゃないですか。  
お母さん、3時間だけでも寝てなど、そういう

ことができていないです。駆け付け支援的なこ  
とをどうやって政策体系に入れていくかって、  
もうメニューはあるはずなのに、全くそれが表  
に出てこない。特にターゲットアプローチと言  
いますが、見るからに困難と言うよりは、誰で  
も陥る、パパも忙しい、近くに親戚もいない。  
ママは何日も十分に寝られていないみたいな、  
非常に危険な状態にどうアウトリーチするかと  
いうことも含めて、足立区なら何とかしてくれ  
るみたいなイメージがまだ湧かないです。メニ  
ューはいっぱい書いてありますが。せつかく足  
立区なので、そこまで行けるといいなと思いま  
す。動画を見せていただいてもいいのですが、  
午後にちゃんとショートステイ使えるよと言っ  
て空を確認してくれて、赤ちゃんを迎えに来  
てくれるところまで足立区がなると、先日起  
きた赤ちゃんを殺してしまったお母さんがいま  
したが、ああいう事件は絶対にゼロになるはず  
です。孤立した育児というのは、別に生きづら  
さを感じているかではなくて、いつの間にかそ  
うなってしまう。そういう時に、そういう視  
点を持ちながら、ユニバーサルアプローチとし  
てもう少し作り込んでいただきたいです。

特に足立区の場合、産前産後支援も非常に力  
を入れておられるので、だからこそ申し上げて  
いるのと、アタッチメントの重要性が改めて示  
されているけれども、それをお母さんにだけ覆  
い被せるようなことは、絶対にあってはなら  
ないということを申し上げたいと思います。

#### ○藤原会長

ありがとうございます。誤解のないように。  
私は全くそういう意図では言っていないですし、  
末富先生も分かってくださっている上であえて  
言うてくださっていると思うので、対立してい  
ると誤解しないでください。補足いただきあり  
がとうございます。基本的なお母さん、お父さ  
んも含めて、その生活の基盤を支えるというこ  
とですね。経済的にもそうでしょうし、ライフ  
スタイルというか、睡眠のこともおっしゃいま  
したが、食べるものも含めて、そういったこと

をまずは作っていくと。その上でどうするかという中身の話ですね。この中身の話が今の日本の子ども政策にはほとんどないです。全くと言っていいほどないので、足立区であればそこにも踏み込んだものが。それが結局ライフコースで考えていった時に、重要な臨界期というか、そういうところで強く長く続く影響を与えることが分かっているので、そこをやった上で、そこを過ぎていても今たくさんあるメニューでフォローしていけるということなのだろうなと思っています。今の末富先生のご意見に対してのさらなる追加の意見でもいいですし、何か他にありますか。

#### ○山崎委員

山崎です。今末富先生から最初にお話が出た通り、この表を見せていただいて、言葉の使い方として気になったのが、資料1-2ページの柱の下の施策のところですね。1-3と2-4に入っている生きづらさを感じる子ども・若者への伴走支援のところ。この生きづらさを感じるというところに引っかかりを覚えました。さっき末富先生からは、生きづらさを感じていたらもう遅いというお話だったかと思うのですが、ここの政策に紐付いているものとしてどんなものが挙げられているのかという、不登校とか発達支援とか、そういったものがメニューとして資料3を見ると入っています。イメージとしてはすごく湧きやすかったのですが、不登校のお子さんとか発達支援を必要としているお子さんをひっくるめて、生きづらさを感じるという言葉でまとめてもいいのかどうかというところが気になりました。今意見が多様化していて、前向きな意味合いで使っているということは承知しているのですが。例えば学校ばかりが居場所じゃないとなって、なぜ不登校だから生きづらいと見るのだという見方も一方ではあると思いますし。障がいを抱えているから困っているみたいな見方をしないでほしいという当事者の方もいらっしゃると思います。その観点から行くと、生きづらさを感じるという言葉で、その

ままでいいかどうかというところは、この資料をいただいた時に気になったところです。

今末富先生がおっしゃった、生きづらさを感じるという部分を丸々削ってしまうという方法もあると思いますし、多様なニーズをとか、社会的支援を必要とするとか、私も他の言葉に置き換えてみたのですが、どうもいいものがなかなか思い付かなかった。このあたりは他の皆さんにもうかがってみたいと思います。

#### ○藤原会長

ありがとうございます。

#### ○水野委員

今、絵本のこれからポピュレーションアプローチが始まるということで、末富先生のお話もあつたのですが、アタッチメントの話からすると、やっぱり私の世代なども子育ては母親がやらないといけないという観念がずっとあつて。ほとんど父親とかはノータッチ。おむつ替えもしたことがないという状況だったのですが。やっぱりもう時代が変わってきているなというところではあるのですが。やっぱり絵本を届けるだけではなくて、しっかりとさっきのお話から言うと、お母さんだけではなく、お父さん、また祖父母、養育者の皆さんで読み聞かせてあげてくださいねといったメッセージと共に、先生がいろいろな研究で導き出したエビデンスも、やっぱり愛着を注ぐためには、未就学児の間にどれだけ読み聞かせてあげることが大事なのだということとか、そういったこともメッセージに添えてぜひ絵本を配っていただきたいと思いました。絵本を渡すだけだと、本棚に置きっぱなしで全然、忙しいというか、寝不足のお母さんたちが読んであげられるのかという、どうしてもYouTubeを見せて終わると。それではもったいないと思うので、しっかりとそういったエビデンスを添えて、またお母さんだけの負担にならないような形でやっていただきたいと思います。

また、悩みを聞きに行くということではあり

ますが、悩みがなければでは帰っていいのかというところではなくて、先ほども末富先生がおっしゃっていましたが、足立区はデイサービスも宿泊型も進んでいますので、そういった産後ケアでこういったものをどんどん活用していただきと言って、産後ケアが予約いっぱい使えなくなって、もっと拡充しないといけないというぐらいにしっかりと情報を伝えていっていただきたいと思います。私も子育て中はそういった情報がなかなか入ってこなくて、相談もどこにしたらいいか分からない。そういった状況があったので、お母さんたちって家庭に入っていると孤立して情報もなかなか入ってこないの。そういったことはぜひ絵本を持ってきたタイミングで言ってあげてほしいなと思いました。

もう1点がやはり生きづらさを抱える子どもや若者というのは、ここ文言としてはあれなのですが、本当に今現在現実としてそういうふうになってしまっている子たちへの支援というのは、もう欠かせないなと思うので、そこへの支援というのは今後の課題かなど。この間相談があったのは、子どもを5人抱えていて、収入の問題ではなくて、今現在食べ物もなかなかないという中で、フードパントリーにも子ども食堂にもつながっていないという現状があります。小学4年生から不登校が続いていて、高校世代になっているけれども、未だにどこにもつながっていない。だけど、実は進学したいのだという思いがあるとか。そういったところも全然つながっていない状況もありました。だけど、全然どこにも相談をしていなかったかということ、学校にもつながっていたし、げんきにもつながっていたし、いろいろなところにつながっていましたが、伴走型の支援ができていないという現状がありました。そういった兄弟が多くいる中で、発達障がいかもしれない、診察してくれて学校には言われたけれども、じゃあどこに診察に行けばいいか分からない。そういう現実もありますので、伴走型の支援をしていただきたいなと思います。生きづらさを既に感じている子たちへの支援というのは、しっかりと

やってほしいなと思いました。

○藤原会長

ありがとうございます。

○小野委員

区民の小野です。末富先生のお話をうかがっていて、今眠たいというところで厳しい思いをされているということですが、今外国にルーツがある方が7%になっているというお話を先日もうかがいましたが、そういう方々もそんな状況にあります。私が以前結婚していた外国ルーツのある方が、お母さんとお父さんは小卒で、親戚中みんな中卒という感じの方々だったのですが。本当に年金とかのこともよく分からないから入っていない状況で。すごくどうやって育てたらいいかとか、そもそもそんな時間に来られたとしても、毎日週7で今も働いています。三つのバイトを掛け持ちして生きてる中で外国に来て、支援に関する通知があったとしても、日本語がよく分からない、小中学生の子どもが見ても分からない。なので、サポートもしきれず、支援にも全然つながらないまま大人になっている人たちでした。

そういうのを見た時に、足立区のいつも綾瀬駅を歩いていると、本当にたくさんの外国の方がいらっしゃいます。国際理解や外国ルーツの方への支援と言いますが、オーストラリアに行こうというプログラムを足立区はしていますが、英語カルチャー、キラキラした白人みたいな、そういうところを国際理解としてフォーカスが当たっている気がします。足立区に多く在住されているフィリピンの方やブラジルの方など、肌の色が濃い地域の方々がどういうことをされているかということ、その方々の方が日本語の支援をいつてされているみたいなことをうかがったのですが。そうではなくて、やはり学校全体でもそういう違う国の人たちのカルチャーを学んだり、身の回りにいる人たちの国のことをよく分かるという、そんな異文化理解がすごく必要で。そういうことをすることで、もっと本当

の意味での摩擦も減ってくるだろうし。皆さんの理解が進むなと思いました。

相手のカルチャーなどを知った後、外国人への偏見等も子どもたちが思わなくなり次の世代には、一緒に協力していけるような社会になっていくのではないかと感じました。

#### ○藤原会長

ありがとうございます。生きづらさのところで、「多様なニーズ」とご提案をいただいて、多様なニーズの一つとしての外国人の話だったかなと思います。水野委員からは、伴走の重要性を言っていただきましたし。まさに多様なニーズに応じる伴走というのを、この足立区の子ども施策の中にどういうふうに表現するのかということなのだろうなと思いました。これは中山委員に聞くしかないなと思いました。いかがでしょうか。

#### ○中山委員

私が今お話を聞いていて思ったのは、柱1で子ども自身、柱2でお父さん・お母さんや養育者ということだと思うのですが。子育て自体をお父さん・お母さんだけでしないといけないということは、すごく厳しい状況だなと思ってまして。我々自身学童をやったり遊び場をやったり居場所をやったりして思うのですが、お父さん・お母さんも手一杯ですし。現在地方の教育とか、居場所・遊び場の支援をしていて、今月の半分ぐらいは地方行き、昨日も能登にいたのですが、能登は地震で子どもが半減して、滅亡待ったなしみたいな状況で。地方で何をやっているかという、柱3です。とにかく地域のみんなで子どもを育てないと、この地域から子どもがいなくなるぞという。全員でやるしかないという状況に今はなっていて。そう考えると、ちょっとまだ足立区は余裕が区民にあるのか、お金が地方に比べてあるのか、親自身や子ども自身で成長や子育てをしないといけないというのが強いなと感じます。

区が地域・団体と共に支える仕組みを整える

から、地域全体で子どもの成長を支えるとなったことはすごくいいと思うのですが。言葉が変わったのはすごくいいと思いますが、資料3を見ると実際に何をやるのかというと、既存の要対協とかPTAとかが出てきて、これだと区民は全然子育てに関わっていないよなというのがあります。

我々の学童は商店街の中であって、年に何回か商店街と学童で一緒にお祭りをやるのですが。そうすると、子どもたちと商店街の人たちが知り合いになるので、帰ってくる時に、おかえり、って言ったりとか、買い物に行った時に、こんにちは、みたいな感じで、結構挨拶をしていったりとか、そういうイベントを通じて仲良くなった親同士で、じゃあ銭湯に行くとなったら、男の子はお父さんたちが連れていき、女の子はお母さんたちが入れるように、混ざり合ってみんなで子どもを見ていくみたいなことがちょっとずつ生まれていると感じます。そういう仕組みを支援するような取組や区民の参加促進、子育て、子どもの成長というのものにもっと地域全体、区民全体で関わり、もちろん制度・仕組みも重要ですが、そうではない一般の人たちも子どもたちと関わり、中には子どもが嫌いな人もいると思うので、そういう人は積極的には関わらないかもしれませんが。ただ、もうちょっと地域全体で子どもの成長を支える、親だけではない預ける人がいるとか、見てくれる人がいるとか、自分がお迎えに行けない時に行ってくれる人がいるといったことを促進する取組が必要だと思っています。

我々の遊び場にもよく学校に行っていない子が来るのですが、お父さん・お母さんはすごくつらい。学校に行っていないことを気にしていたり、いろいろなところに連れていったりしているのですが、全くそうではない、全く関係がない、学校に行っているとか行っていないとか聞かない人たちが地域にいるとか、一緒に遊んでくれるとか、それだけでも救われることがあるかもしれません。そういう場とか人が増えていくことが大事だと思っているので、柱3をも

うちちょっと。3だけ二つしかなくて、施策も既存のものが並んでいるので、もうちょっと充実していただきたいなと感じました。

#### ○藤原会長

ありがとうございます。区の職員とかNPOとかそういった目線ではなくても良くて、そういった地域の人たちが子どもと関わっていたり、見ていくということをどう後押しするのか。そんな事業がもうちょっと見えるといいなというのは私も思っています。それが単に年に1回のお祭りで済むとは思えないのです。とはいえ、じゃあ「聞かせて子育て」事業のようにNPOが関わります、としてしまうと、逆に引いてしまうのかと思うように利用者が増えなかったことも経験してきたと思います。なかなかうまく仕組みが難しいなというのが現実問題にあると私も認識しています。簡単ではないとは思っているのです。

#### ○政策経営部長、あだち未来創造室長 兼務

今、町会・自治会の加入率が低いこともありまして、町会で子どものイベントをやっていますね。町会に入っている子どもだけではなくて、誰でもいいよといったイベントに補助金を出す取組を始めています。結構そこから町会の加入につながることも60件近くあります。町会加入というのは一番の目的なのですが、それだけではなくて、地域の人と子どもが交わるような機会を今いろいろと設けているので、そういったこともここには現れていませんが、その一つかなと思います。あとはファミリーサポートの仕組みなども、地域の方の助け合いで子どもを見たりすることもあるので。そういったものを少しこの中に入れていけるといいのかなと聞いていて思いました。また事務局で検討させていただきます。

#### ○藤原会長

ありがとうございます。

#### ○阿部委員

ちょっと違った視点でいくつかコメントをさせていただきます。冒頭で藤原先生がおっしゃった情報が届かない人というところで、そこはすごく重要だと思うのですが。ちょっとステップバックをして、もちろん具体的に会って届けるとか、いろいろな仕組みはあるのですが、区が一番使っている手段はホームページだと思います。そここのところも点検なさっているのかどうか知りたいです。私は別に足立区のホームページが悪いと言っているわけではないです。

昔の論文にこれは足立区とは全然違うあるX市の話ですが。担当部署の方々が、この施策が一番市民から問い合わせがあると思っていることと、ホームページに載っている情報が違いました。それはホームページをやる部門と、担当局の方々が定期的にそこで情報交換をするということをやっていないで。結局ホームページが業者とかに任せきりになってしまって、日々の業務が忙しいので、なかなかそれが日々アップデートすることができなくなっていることなどが原因で起きていることが多く、その論文は、あるキーワードがあった場合、例えばうちに不登校の子どもがいるという時に、市のトップページから何クリックすればその情報までたどり着けるかというのをシステムティックにやっているのですが。でも、意外と何クリックもしないと届かないんですね。

この場には広報課の方はおそらくいらっしやなくて、そういったホームページを定期的に点検したりレビューするというのは、意外と大事だったりします。なので、広報にお金を掛ける必要がある。例えば情報がアップデートするのにラグがあるのだとすれば、うちの大学もそうですが、特別な部署に行って、これこう書いてくださいってやらないといけないみたいなことがあるのですが、それをやめて担当部署でアップデートができるようにするとか。そんなところもちょっとレビューする必要があるのではないかと思ったのが一つ目の提案です。

政策の中身についてですが、子どもの安全の

視点を取り入れていただきありがとうございました。今の子どもが面する危機的なところで一番重要なことは、やはり犯罪に巻き込まれるとか、あとは薬物とかオーバードーズの問題などです。私はアメリカ育ちなので、アメリカの友人がたくさんいますが、アメリカでは子どもの1位の死因になりつつある状況で、日本もおそらく10年後にはそんな状況になるのではないかと危機感を持っています。

資料2のところではいろいろな政策を挙げていますが、これが悪いと言っているわけではないのですが、みんな子どもの方に、子どもが知識を得て、それで正しい行動をするように向けているようなものです。足立区って例えば健康のところでは、野菜から食べるのが重要ですよというパンフレットを配るのではなくて、実際にそのような行動を取るように様々な施策を実施してきたと思います。でもこの安全のところではそれをやっていないと思います。それはおそらくこれをやっている部門というのが警察ですとか犯罪部門のところ、そういったマインドにまだなっていないと思います。劇をして、子どもたちが体育館でみんな見れば、正しい行動を取るようになると思っているところがあるのではないかと思います。もう少し具体的に何かできないのか。ここはまだまだ発展途上かなと思うのが正直なところ。これをやはり子ども計画の中でどうやったらこういった行動を取らないようになるのかということをもう少し具体的に進める必要があるのではないかと考えています。例えば中学生であれば、スマートフォンを持っているならば、スマートフォンを持ってこさせて、どうすれば情報を取られないようにできるのかとか、ホームページなんて変なものが出ないようにするとか、そんなことも授業の中でやればいいじゃないかと思うんです。オーバードーズの話でも、自殺の話でも、性加害の話でも、啓蒙活動以上にもう少しできることがあるといいのではないかと。これは今後の課題だと思いますし、本当にこれをやられたら、日本全国で一番のお手本となるような施策とな

ると思うので、足立区には期待しています。

三つ目が調査の中の話ですが、子育てアンケート調査結果の中で説明をさらっとしていただいたのですが、この中で一番使えるなと思った項目が6ページで、教育費用の負担が大きい費目の中に、小学校では体育用品、中学校では制服・靴代、修学旅行費といった項目が挙がっています。その他の学習塾代ですとか、そういったところはあまり区として何かできないかもしれませんが、これらは区ができることだと思うので、こういったところはぜひアンケートの項目を使っていたきたいなと思います。

この資料は非常に面白いのですが、ちょっとサンプルが小さすぎて、収入と子ども数で分けているので、一つひとつの中で100を切ってしまうたり、場合によってはサンプル数が6というのがあったりして、ちょっとこれすごく読みづらいので、もう少しまとめるやり方があったかなと思います。

それから、子どもの健康・生活実態調査については、経済状況を始めいろいろところで改善されているのですが、今回有効回答率が56.8%なのですが、10年前と比べてどうなのかというところが気になります。学校で配布していたらもう少し高かったのではないかと思います。

○藤原会長

学校で配布したのですが、ネットで回答できるようにしました。

○阿部委員

前回に比べて回収率が下がっていますか。

○藤原会長

下がっています。

○阿部委員

改善したかどうかははっきりと言えないところが心配です。

○藤原会長

学校で回収する形で、去年は新しいコーホートが始まったのですが、その2年前は同じようなやり方で学校配布し、学校で回収する方法で、生活困難数が下がっています。

○阿部委員

下がっているとは思いますが、単純にここでは平成27年と令和6年を比較しているのが気になりました。

○藤原会長

ありがとうございます。

○中村委員

今の阿部委員からの発言を受けて、先ほど資料5の教育費用の負担が大きいというものがありました。このアンケートを受けて、実は今年度からここで言うところの学用品に当たるものや修学旅行費、あとはそれ以外の自然教室の費用もほぼ無償になるぐらいの助成を始めます。合わせて学習塾とありますが、いろいろな習い事もなかなか費用がないということもあるので、さらに令和8年度からになりますが、これは公立の学校だけではなくて、本当にその世代の小1に上がるお子さんと、中1に上がる年代のお子さんに入学準備金という給付金も出す予定で今進めています。ですので、このアンケートの結果を受けて、新規事業を今年度以降予定しているということをお知らせしたいのと。あとは先ほど委員から防犯とか犯罪に巻き込まれるとか、薬物依存とか、そういった話があった時の施策が防犯劇をやるとかだけではという話がありました。これに関してはいろいろと教育委員会の中でも話し合いをしている中で、やはり普通のこういう劇ではなくて、当事者。例えば実際に薬物依存になってしまった方にお話をさせていただいた方が、当事者の声の方が確実に子どもたちに届くと、実際に現場でそうだったという話をうかがっている。やはりそういう方々がどこまで外に出てきていただけるかは別

問題ですが、やり方を工夫することで子どもたちには届くかなということも意識しながら施策を打っていくべきだと思っています。

○藤原会長

ありがとうございます。犯罪などは寝た子を起こしてはいけないみたいなことがあります。やはり今中村委員がおっしゃったように、実際に当事者の話の方が入ると思います。非常にいいご指摘だと思いました。あとは入学準備金ですが、まさに今議論していたことをそれに当てはめると、本当に困っている世帯に入学準備金があるという情報が行くのかです。それがこういうふうにするので、大丈夫ですという話を聞きたいのですが、何かありますか。

○中村委員

まだ周知の方法までは詰めている最中ですが、全家庭になるので、個別世帯にはご案内はしません。ただ、最近役所の通知を見ない方も非常に多いので、いろいろな媒体を使いながら周知をしないと、本当に届かないということがありません。就学前であれば保育園とか幼稚園を使ったり、いろいろな機会でチラシを配るなど、そこは策を練りたいと思います。全員の申請につながるような手法を考えていきたいと思っています。

○藤原会長

そこが中山委員もおっしゃっていたように、地域で支えていく。その地域の人たちが知っていたら伝わるのかとか。伴走するって何なのかということが、何かもう一步踏み込まれるとすごくいいなと思ったので、そういう多面的な伴走の仕方を考えていただけるといいかなと思いました。

○田中委員

柱3が弱いというのは、そもそも先ほど町内会の話がありましたが、地域の共同体はほぼ機能していないのかなと思っていて。町内会で年に1回とか何かイベントがあったとしても、そ

れによって地域全体というか、我々が地域に属しているみたいなことを感じる機会ってあまりないなと思っていて。その中で柱1の居場所とか、そういう場にもつながってくると思うのですが。青年期とか若者の居場所とかをもう少し整備してあげると、よりその中から自主的なコミュニティとして文化が生まれてきたりして、その中でいろいろな交流が起きる。その施策の中にもロールモデルとの交流がありますが、上から押し付けた形のロールモデルではなくて、そうした自主的なコミュニティの中でのロールモデルを見つけていくみたいなことがあると良いのかなと思っています。具体的なイメージとして結構ですが、コンテンツを区の側が用意するってすごく大変だしお金が掛かると思うので、箱とか、例えばライブハウスとか、YouTubeの公開収録の場とか、そういうのが箱としてあって、そこで勝手に若者のコミュニティができていくみたいなところがあると、その中で若者同士の出会いとかもあったり、少子化の対策にもなると思います。そういった中長期的な目線で見ると、そうした若者の居場所とか、コミュニティみたいなものが10年後とか、地域全体で子どもの成長を支えていくみたいなプラットフォームになっていくのかなと思うので、長い目で見てもそういった場があると、我々として単純に楽しいということもありますし。そういうところからいろいろできていくといいのではないかと思います。

○藤原会長

素晴らしいご意見ありがとうございます。

○太田委員

今のお話にも関連するのですが、一つは子どもの支援というところでは、居場所の話が出たかと思いますが、その中に違和感を覚えるのは、どうしても具体的な場所や組織というところに居場所を求めた議論が多いかなと感じています。そもそもそういう人が相談できるというか、相手がいるという社会環境を作っていくことが、

広い意味での居場所なのではないかと思っています。その意味で柱3の話につながってくるのですが、先ほどの話のさらにもう1歩手前ぐらいのところ、いかに足立区の中でそういった子ども・若者に寄り添った考え方を広めていくか。進化させていくかという視点が大事ではないかと思っています。

一つは先ほど生きづらさを抱えているという表現の問題がありましたが、その方々の話がありました。発達障がい、支援が必要な方ですとか、それから引きこもりの方ですとか、そういったところの方々の当事者は悩んでいるのですが、本当にでは周囲の人たちは皆さん理解をしているかということ、まだまだ引きこもりであれば、サボっているのではないかという見方をされていて、それが生きづらさにつながっていることもあると思うので、まだまだ足立区として社会全体として理解を深めていくところの施策はもっと必要だと思っています。

もう一つは、この計画で大きな柱を作っていくわけですが、まだまだ社会全体で言うと、子ども・若者対高齢者や単身の現役世代の方とかで、まだ社会全体で本当にどこまで理解されているかということはあると思います。このこども計画というのは、最終的に打ち出される中で、我々がどうしてこのこども計画が大事だとしているのかを訴えていく。社会全体に理解を広めていくというアプローチは一つこの取組の中で外せないポイントだと感じています。

○藤原会長

ありがとうございます。確かにそうですね。

○ぬかが委員

先ほどの話を聞いていて、箱を若者にとというのはすごくワクワクしました。どうしても居場所づくりと言うと、何か行政チックに考えると、お膳立てしてみたいなことを考えるのですが、ある意味綾瀬のぐるぐるは若者対象ではないけれども、箱を準備して、やりたいことを応援しながらコミュニティがどんどん広がっていくと

いうものになっていると思うのだけれども。その若者バージョンというか、そういう若者の箱があってコミュニティが作っていきけるみたいな、そんなことはすごくいいなと思いました。

それから2点目なのですが、これで言うと、妊娠前から産後期の支援の中に入っている事業の中ですが、最近公園で赤ちゃんを連れてきているお母さんとかに積極的に話し掛けたりして、困りごとを聞いたのですが、その中で印象的だったのが、パパさんとお子さんという方で、大体2歳になるまでの方は本当にワンオペ育児になっていて、聞いてみたら圧倒的に子育てサロンを利用してというのが対話しているの感想でした。そこで例えばすこやかプラザが新しくなったから、そこに行くようにしているとか、ちょっと遠いけどそこに行くのだとか。その中ですごく言われたのは、特に一時預かりというのがすごく助かると。本当にずっと1人で子どもと向き合っている中で煮詰まってしまうと、その時に1時間500円ですけど、一時預かりを。それで2時間預かってもらおうと自分の時間が2時間できるだけで全然違うんです、という話をすごく言われたのが印象的だったんですね。私はここの部分の子育てサロンとか一時預かりの充実というのを、ぜひしっかりやっていただきたいなと思っています。とりわけこれから乳児の保育料が9月から東京じゅうで無料にしていこうという中で、一方では2歳、3歳になったら幼稚園に入れようと思っている自宅で育てているお子さんたちの子育てサロンの一時預かりだけは相変わらず1時間500円というのは、やはりお金だけの問題ではないにしても、やはりお金も経済的な負担が心配なくそういうところに預けられるものを充実してほしいなと思いました。

それからもう1点は、先ほどもお話が出ている外国にルーツを持つ子どもに対する支援の部分ですが、これも最近例えば足立区でやっている日本語の教室を見学に行ったり、ボランティアのお話を聞く機会もあったのですが、私が見学に行った時の教室は、通級教室なのでもとも

と在籍校があつて、週に1回、2回だけ日本語教室の学校に通います。そこで1日過ごすのですが。そこで日本語教室でコミュニケーションの教室を受けるのですが、そこに通っているのは中学生で、足立区では3校整備しています。3校のどこかに通えるようにしようというので取り組んでいるのですが、私が見に行つたところのお子さんは中学生で、コンゴから来たお子さんと中国から来たお子さんでした。先生も一生懸命コミュニケーションを取ろうとしているのだけれども、結局見ていると、あ、この子たち全然理解していないで、先生がこうだねって言われて、はい、こうですって言っているなって。これではちょっと苦痛だろうなって思っていました。しかし、在籍校に戻ると、何も分からないわけで、日本語で文章を読めないし、小学校低学年とかから日本に来ていたお子さんだったらまだいいのだけれども、そうではないお子さんもたくさんいらっしゃるという点では、その辺の充実というのを、量・質共に充実しなければいけないのではないかと思います。一方でボランティアにため息交じりで言われたのが、この子たち、私たちの手を外れて、ボランティアの教室には23時のグループもあるのですが、抜けてしまうと途端に本当に、社会で他に生きていく道がなくなるから、すぐ犯罪の方に引き込まれてしまうということでした。そう考えた時に、本当にここの部分をもっともっと深めてほしいと思っています。例えば子どもの安全の視点の4のところ、在住外国人との子ども向け安全啓発講座とありますが、これは東京都がやっている事業で、多分ほとんど知らないだろうなと思います。また、学習支援事業をいろいろなところで取り組んでいると言っていますが、実際には週2回だけではとても身に付かずその後を補う事業を去年、おとしぐらいから区として始めましたが、それも一つのところは定員が埋まり受け入れ中止になっているので、子どもたちのために充実して欲しいなと要望です。つまり、体系とか柱がどうこうという議論では私はないのですが、この間に見て非常に

感じているので、発言させていただきました。

#### ○藤原会長

ありがとうございます。

#### ○事務局

事務局からお答えします。まず先ほど阿部先生がおっしゃっていた、ホームページを媒体とした情報発信のところですが、足立区としてはホームページの総合的な管理は報道広報課というところが実施していますが、それぞれの個別のページについては、各担当所管が責任を持って作成しています。なので、情報についての新しいもの、古いものも含めて、各所管がそのページについては責任を持ってやっています。足立区については、今対外向けのプロモーションを非常に力を入れてやっています。報道広報課だけではなくて、シティプロモーション課というところが、区全体のプロモーションを推進していますので、シティプロモーションと報道広報課が協力して、各所管の情報も含めて区外にPRできるような体制を取っています。ただ、情報について伝わりにくい部分があるというところは、課題としていただいた形ではあります。

先ほど阿部先生が居場所について検索したら出てこなかったという話がありましたが、確かに今多くのところで居場所ということが求められているところです。今後足立区としても、必要な方が必要な居場所にたどり着けるような、そういった周知の方法がどういった形でできるのかというのを、全庁的に調査を掛けて、今年度中に何とか形にしたいなと思っています。そういったところをホームページで拡充が進めていけたらいいかなと思っています。

それから、先ほど田中委員から、青年期の若者の居場所についてのご意見をいただきましたが、ぬかが委員からもいただいた通り、あやセンターぐるぐるが足立区の今中心的な区民のやってみたいをやってみるといふところの後押しをするような施設として今運営しています。そこにはただ単にやりたいと思った人がそこで自

由にやってもいいよというわけではなくて、中にはコミュニティビルダーといった、やりたいことを側面支援するような方々が常駐しているという仕組みになっています。そういったところを起点にして、そういったやりたいを実現する人が増えていって、それが区の中の活力につながっていくといった形で広げていきたいなと考えています。

今新しい拠点の考え方も、今後進めていく予定ですので、区の中でどんどんそういった施設が広がっていけば、より区の活力が広がっていくと考えていますので、そこについては区としても進めていきたいと考えています。

#### ○勝田副会長

昨年度まで広報とあやセンターを所管している部長でしたので、補足をさせていただきます。今回の柱の中で、必要な人に対する伝わる情報発信というのは、ここの視点だけではなくて、毎年政策経営部の広報部門の重点的な目標として挙げています。区の方の情報発信ですが、広報が区の媒体としては一番伝わっているのですが、ただ皆さんが広報を読んでいるわけでもありませんし。では、若者だったら SNS だったらいいのかというと、決して足立区の X とか LINE も登録者は多くない。特に若者の登録がない中で、どういった形で私たちが伝えたい人に情報が伝えられるのかというところは、これは本当に大きな課題として毎年認識しています。直接お話をするのが一番いいのですが、なかなか会えない場合とか、どうしたら伝わるのかというところは毎回模索しています。この事業の情報を伝える、相手の属性・特徴によってどんな形だと情報が伝わるかというのは、その施策ごとに毎回考えて伝えていきますので、そこはこの若者だけではなくて、すべての施策に共通する大きな課題なのかなと認識しています。

また、次の活動拠点として、竹の塚をターゲットにしています。竹の塚もまずは現地に入って、どういう課題があるかということ、やはり今 UR があるということも含めて、外国の方がか

なり多くなっています。比較的高齢の方というのは、あまり交わるという形ではないのですが、若い人たちはそういった外国の方たちも含めて、何か一緒にやっていると面白いよね、竹の塚はいい街なのですが、あまりいいイメージがもたれないということで、もう少し竹の塚がいい街だということをアピールしたいという話があります。ぜひ今若者を中心に、若者がやりたいことができる街を目指していきたいということで、今若者のヒアリングを進めています。そういったものが進めば、若者中心に何かやりたいことができる街が作ればなということ、今拠点の構築も含めて考えているところです。

#### ○加藤委員

柱立ての施策案について、3点ほど言わせてください。まず何人かの委員から出ていますが、外国にルーツのある子どもたちへの支援についてなのですが、私が言おうと思っていたことを半分ぐらい小野委員・ぬかが委員におっしゃっていただきましたので、概ね賛同できるところです。ちなみに青井高校はいわゆる白人系は在籍しておらず、一番多いのは中国国籍、それからフィリピン国籍、アフリカ国籍の方もいます。日本語能力は特に人種には関係なくて、それまで生きてきた歴史によるものだと思います。

東京都教育委員会ですが、2年前にそれまで各部署で行ってきた国際交流だとか、外国人への支援だとか、そういったところの部署を一つにまとめて、グローバル人材制度という組織を作りました。今3年目になるのですが、ここで力を入れているのは日本語の指導です。日本語指導担当というのが一つの組織としてあり、組織的に取り組んでいるのですが、まだまだ課題も多くて、整理し切れてはいないのですが。ただかつてに比べると、支援体制はだいぶ充実してきたと思います。

足立区としても様々なところで外国にルーツがあるという言葉が点在していますが、柱の施策の中に外国にルーツがある子どもたちに対しても、積極的に支援を行なっているのだという

メッセージを込めて、それが分かるような文言が入らないかなと思います。ぜひそういった言葉を、施策なので抽象的にならざるを得ないかもしれませんが、そういった言葉が入ってくるといいなと思いました。

2点目。命の問題ですが。本当に悩ましいところで、今に始まった問題ではないのですが、命を守る教育という言葉がありますが、教育も大事ですが、教員だけではなかなか限界があるなど。小中学校もそうだと思いますが、スクールカウンセラーであるとか、ユースソーシャルワーカーだとか、そういった人材支援もしているところですが、教員以外の子どもを見守る人がもっと必要だなと思います。それこそ専門家ではなくても良くて。近所のお兄さん・お姉さんでもいいです。何か気軽に頼れる人が身近にいと、また悩める子どもたちにも違うのかなと。安心感を与えるというか、提供できるようなシステムがあるといいなと思います。

最後。安心して子どもを産み育てることについてですが、施策の資料3を見ても、育てることについてはかなり充実していると認めます。それから産むにあたっての支援についてもそれなりにあるところですが、じゃあ何が足りないのかというと、産みたくなくなるような施策がない、ちょっと見当たらないなと思います。先ほど各家庭を回って絵本を配るというのがある、すごくいいなと思って聞いていました。入院したらソーシャルワーカーが付きますよね。お金のこととかいろいろ相談に乗ってくれる人がいますが。頼りになる人が、さっきの子どもの自殺についてもそうですが、何か気軽に相談ができる人が、頼みもしないのに付くみたいなの、そんなことがあってもいいのかなと。実際にそういうことはないのですが、何か始めないと、新しいことを始めないと、長く続く課題の解決にはつながらないと思います。そういった思い切ったことも必要ではないかと思います。

結論を言うと、人・物・金で一番充実させてほしいのは人だと思います。それが一番難しいことも分かっていますが、ここで言わないと前

には進んでいかないと思いますので、あえて申し上げたいと思います。安心感を与えるということ、人を付けるということをぜひ施策に反映させてください。

○藤原会長

ありがとうございます。

○山田委員

資料1の柱立てについてコメントをさせていただきます。一つ、柱1についてなのですが、田中委員の発言と関連するのですが。施策が六つ並んでいますが、最後の1-6は性格が違うものかなと個人的に思いました。視点1に既に柱の三つを貫いてですね、意見表明と参画機会の創出と書かれているので、それで十分かもしれないと思うのですが。施策の1-1の1-5のベースになる部分の気もします。つまり、柱1はすべての子ども・若者の生き抜く力を育むということで、もちろん保護者のサポートもその中には具体的な資料3の中に含まれていますが、柱の趣旨としては、子どもや若者をサポートしていくという趣旨だと理解しました。そうすると、1-6は1-1から1-5の土台というか、下の方にあって、それぞれの1-1から1-5の施策を実施するにあたっての様々な形で意見を表明したり、参画したり。可能であれば今後計画を推進していく上で、目標を設定したり、それを振り返ったり改善したりする時に参画ができるような、そんな回路があるのかなと思いましたが。この図でもそうなっているとは思いますが、もしかすると横長にして、1-6だけ1-1から1-5の下に、生き抜く力を育む上で何らかの形で子どもたちの意見の表明や参画や、実際のそれぞれの施策を動かしていくにあたって、参加していく回路みたいなものがビジュアル的にも表現できるのかなと思いました。

2点目ですが、生きづらさについては私も同感で、文言の見直しがあってもいいのかなと思います。柱の2に書いてある整理のポイントの

中では、ユニバーサルアプローチとターゲットアプローチがそれぞれどういう施策に反映しているかの説明があるのですが、柱1についても同じような、つまりこれまでの議論の中で全体的に底上げをして、生きづらさを感じる以前にサポートをしていくことが大事だという話と。現状厳しい状況に置かれている子ども・若者がいることも事実なので、その人たちに焦点を当てて支えていくことと両方必要だということが、これまでのやりとりで確認されたと思います。何か整理のポイントの中にそういった説明を入れてもいいのかなと思いました。

最後になりますが、生きづらさと言うかは別にして、これまで外国ルーツの子どもだとか、不登校の子どもが言及されていて、資料3の中にもそういう現状の取り組みが整理されているわけですが、ヤングケアラーに対する支援みたいなことも、実際にこの計画を立てて動かしていくにあたっては、現状ではそれほど強調されていませんが、こども大綱の中にも重要なポイントとして示されていますので、そういったことも今後反映させていくといいのかなと思しました。

○藤原会長

ありがとうございます。

○菊地委員

先ほどの加藤委員と山田委員と同じように、施策の1-6の意見表明・参画、自立への後押しのところ、私の今の立場としてもすごく気になると思っています。特に私は今大学4年生なのですが、大学生との交流体験と示されていますが、私はこれがまず途中で資料の2の8のところ、区内大学と連携し、子どもと大学生が交流できるような体験事業を作っているところを拝見したのですが、大学生ってみんなそれこそ小学生とかと関わりたい子はすごく多いと考えていて。私自身も来月も行きますし、去年も小学校の補助教員をさせていただいているのですが、その時も若いからなのか、大学生

だからなのか分かりませんが、すごくたくさん小学生たちが集まってくれて、一緒にご飯を食べようと言ってくれたり、あとはもめ事があった時にも、先生には言いづらいけど、年が近いお姉さんには話しやすいという感じで声を掛けてくれるという、そんな存在が、今私自身がこうなれているということは、他の大学生とか高校生でも、そういう立場になり得るのかなと思ったので。もちろん大学との協定みたいな形にしてもいいと思いますが。公募みたいな形で。私の中ではそれこそ足立区の奨学金は知名度が高いと考えているので、そこの奨学金で、私自身も借りているのですが、そこで作文を書くところがあったりするのですが、そこはまた違う視点で、そういう小学生との関わりがあるようなものとして、これからも地域の活性化に携わってくれる学生みたいな形で設けてみていいのではないかなと思いました。奨学金とかがある方が、大学生の目にも映りますし。何か自分事として考えられるかなと思いました。

○藤原会長

ありがとうございます。

○高木委員

本当に皆さんからいろいろなご意見が出ていて、私が気が付いているのが、青年期の保護者支援がなかなか具体的なものがまだないという話でしたが、資料1の1ページ目にも、左側の下の5のところ、青年期の保護者への支援がやや手薄のように見えて書いてあり、子どももいずれ若者になって行って、そして大人になって行って、高齢者になって行って、一つのライフプランというのがいろいろあると思います。やはり確かに生きづらさという言葉というのは、ちょっとネガティブかもしれませんが、生きたい若者、生きたい子どもというものもいるということで、例えばうまく学校に入れない、うまく就職のルールに乗れなかった人たちが、どんなふうに分かっているのかというところで、要は親にとっては何歳に

なっても子どもは子どもなので。そういったある程度成人になった青年を、例えば年金の話とか、うまく就職ができなかった時に、自分はどうなふうに分かっているのかというところで、システムなのかと思います。加藤先生もおっしゃっていたように、何か人・物・金の中でやっぱり人が一番というご意見がありましたが、そういったいわゆるもちろん自治体の人たちもたくさんお金を掛けて施策というのがあるのですが、本当に身近な近所というか、どちらかという施策的なフォーマルではなく、インフォーマル的な人の力とか、そういったものが分かるというか、そういった方に聞ける環境があるというのかなというところで。具体的に言うと、例えば福祉課にどんな手続きをしたらいいのだろうかとか、その辺の流れを保護者も知る機会があるというのかなと感じています。そこを具体的に教えてくれるところ。もちろん実際に窓口に行って教えてもらえるというのですが、例えば国民年金の手続き方法を詳しく教えてくれるシステムがあれば、保護者は知りたいのかなと思ったのでお願いしたいと思います。

○藤原会長

ありがとうございます。

○小野委員

今回どの施策も大事なのですが、この中でどうしても届かないといけない情報と、届いたらいいなという情報とがあると思います。本当に微々たる住民税を毎月お支払いしている区民からすると、本当に届いてほしい人に届くことを本気になってほしくて、予算の半分を広告費に使ってもいいと思うので、本気で届けた方がいいと思います。子ども食堂に行けるお母さんって、人としゃべりに行けるぐらいの元気があるじゃないですか。そんな人ではなくて、本当にお家にもって働きにも出られない、鬱になって出られないというお母さんに情報が届かないといけない。そうすると、本当に広告会社をたくさん使ったりしてといったことは、行政

的にちょっと難しいというか、私も堅い組織で働いていて、すごく難しいと実感しています。ですが、そういうところに税金をぜひとも使っていただきたいと思います。届けるための工夫として、特定の精神的な病の時に処方されるある薬を出した時に、このパンフレットを渡していただくとか、地域で一番安い業務スーパーに人参にシールを貼るとか、風俗の女性が働いている待機所にチラシを貼ってもらうとか、本当にやろうと思えばできることってすごくあると思います。

先ほどどうやって届けるのかという質問を藤原先生が何度もされていましたが、それに予算を本当にたくさん使ってもいいぐらい、本気になっていただきたいなと一区民として申し上げます。

#### ○藤原会長

貴重なご意見ありがとうございます。

#### ○しづや委員

感想としては、計画を立てる上で皆様お一人お一人の段階で、振り出しに戻るとまでは言いませんが、その段階をしっかりと用語の定義であったり、しっかりその文章を一つひとつのことで、これは区民の方々にも見ていただきたい。そもそもの計画を知っていただきたいというところから始まっていると思いますので、その辺はしっかりと整理をするべきだと感じました。また、一つ私が感じたところで、これは子どもと言うよりも若い世代の意見ということで、先ほど阿部委員や田中委員もおっしゃっていましたが若い世代たちが拾えるところということで、阿部委員がおっしゃる通り、私もよく聞くのが、足立区のホームページ、何回もクリックがいるというのは私自身もいろいろな区民から聞いていて、どこに相談したらいいのかという意見は我々も同じ意見だと思います。そういった中で先週、公式LINEの話を長谷川元副会長にもお話をしましたが、登録者数は全然増えていません。それが現状です。また、足立区の

Instagramができました。なかなかそういった情報が拾えていない状況がまずはそもそも問題なのかと私は感じています。そのInstagramとかLINEもないよりはいいわけで。SNSは重要なところで、区の方々にもお伝えしたいですが、こういった計画審議会というのは、一人ひとりの皆様がモチベーションを高く持って、足立区のためにという思いを持ってくださる方の方であって、そういったことをまずは公表してほしい。しっかりとこういったことができたことを公表してほしいというのは私、どこの審議会・協議会でも言わせていただいています。そこでどんどんとアプローチを、公募委員・専門委員にもして行ってほしいですし、Instagramの状況も全然伸びていないので。こういった状況を広めれば広めるほど、子育て世代＝若い世代ではないですが、しっかりと情報をキャッチできる場面が増えるのは事実だと思いますので。これは最後お願いになりますが、そういったところも踏まえて、今後はこういった情報の共有の場も増やしていきたいと思っています。

#### ○藤原会長

ありがとうございます。いろいろとあるのですが、2点は足立区の施策としてお願いできるかなと私なりにまとめられそうな気がしたので、それだけ申し上げたいと思います。一つはホームページについてです。AIを活用して、誰がどのように検索してもすぐに必要な情報にたどり着くシステムをホームページ上で作っていただきたいということ。もう一つは、地域においてインフォーマルな伴走者、サポートをする人、できれば若者が子どもをサポートする。あるいは若者同士かもしれませんが、そんな存在を、すぐに無理であればパイロット的にどこかで試しにやってみるのもいいかもしれません。少なくともそういうことを公募委員も含めた若者と一緒にどうやったらできるかを話して、企画してみるということはスタートしていただきたいなと思います。いろいろな課題が出たと思いますが、情報が電子化されていれば、翻訳ツール

を使うことで外国のルーツの方の生きづらさも何か解決できそうな気がします。妊娠初期、妊娠中から子育ての初めの頃からの伴走支援だったり、小学校に入っていく中で全然どこにもつながっていない、小野委員が言っているような方も、きちんといい意味でのお節介な形でドアをノックし続けるような人といったイメージがあると思います。その伴走者がホームページで調べれば分かる、調べる元気がない人の代わりに調べられる、というような伴走者がいれば情報が届くのではないかなと思った次第です。現実離れしている提案かもしれませんが、ぜひご検討をいただければと思います。

では最後、答申書について、濱田さんからお願います。

#### ○事務局

本日は様々なご意見をいただきましてありがとうございます。先ほど藤原会長からありました通り、区の情報を必要な方に届けるといったところは、非常に重要な観点かなと考えています。ホームページとか広報、いろいろな媒体がありますが、実際に例えば若者にリーチができていないとか、そういったところは課題としてあります。必要な方に、情報が入手できない方に、例えば伴走者が伝える工夫ですとか、そういったところは今後もやっていく必要があると思います。あとは地域における、今足立区も六つの大学が誘致されています。大学生の活用というところについては、今審議委員で参加していただいている中山委員については、ボランティアとして多くの大学生を活用されているといった事例もありますので、そういった知見も借りながら、区の中で大学生をどう活用していけるのかというところも併せて検討していきたいと考えています。

最後になりますが、答申書についてですが、今までいただいたご意見等については、6月下旬までに答申案をこちらでまとめまして、皆様の方にお送りします。続いて、皆様にお送りした答申書案については、7月下旬までに答申書

に意見をいただき、次回の8月に予定している最後の審議会の中で、区の方に答申をいただくという形で進めてまいりたいと考えております。答申書については以上です。

#### ○藤原会長

では、以上で第4回のこども計画審議회를終了します。本日は活発な議論をありがとうございました。